○役行者座禅石〔楼門の左のかた山上にあり、高さ一丈〕

それ当山は畳嶺巍々として、漢の劉阮が薬を採し天台山の面影あり、山路邃ふして白雲封じ、飛泉寒ふして峭壁に趨る、銀河の三千尺もこゝに見えて、あるは花を誘ひ紅葉を連て落る澗の水は、三々と岩にふれて、若鮎、江鮭子昇る。惣じて此山は石室岩洞多くして、壷中に天地を縮め、神仙のおのづから家あるの奇境なり。

桟敷嶽〔岩屋の北三十町余にあり、麓は東河内村なり〕此所四面みな山にして嶽は其上にこれあり、是則惟喬親王遊覧眺望の高楼ありし所なり。此地の南の方一面に晴て、鷲峯笠置の翠嶺、生駒葛城の高根、あるは難波津のかたまで眼中の客となりぬ。絶頂に池あり、むかしより此地に於て土器金具の類種々の器物を掘出す、然れども家に採納れば忽怪異の事あつて、あるひは悩乱しあるひは狂惑す、大に恐惶て元の地に送り返す、是則かの親王の御所に用ゆる調度なりといふ。又云、むかしより此地に於て鶏鳴くことあり、由縁をしらず。又同き麓の林の中に三本竹といふあり、其太さ杖の如し、三本生じて毎年三本の筍を生ず、其長ずるにおよんで初の三本おのづから枯る、是親王の鞭をさし給へるが今に生るなりとぞ。又此南の山腹に岩間より清水涌出る、至て清泉にして寒暑に増減なし、是は親王田猟し給ふとき、鷹に此水を飼しめ給ふ所なり、故に鷹の水飲と号するなり。されば楼台空しく朽て千歳のむかしとなりぬ。薄苅萱茫々としげり、鷓鴣の声ところ〴〵に聞ゆ、鬼火も変じて只秋風のみ簫々として今にかはらず。